

## 大豆サチュタカの山間部用栽培指針

◎サチュタカの適応地帯：サチュタカはニシムスメよりやや遅く10月下旬に成熟する中生で、県内肥沃地に適応します。ニシムスメ同様分枝が少ないが、晩播適応性が高いので、条件の良いときに播種する。高品質安定生産のため、雑草防除、病害虫防除は必ず行ってください。

月	旬	主な生育段階及び作業	栽培管理のポイント
6	上	○ 施肥・耕起 ○ 種子消毒 ○ 播種	<b>圃場の準備</b> ①排水溝の設置：圃場の排水状態に応じて、周囲に深めの排水溝を設けておく。 ②酸度矯正：耕起前にp H6.5を目標に苦土石灰を100kg程度施用する。 <b>播種作業</b> ①施肥・耕起：耕起前に10a当たり窒素1～3kgを施用して、丁寧に整地する。 ②種子の準備：必要な種子の量は10a 当たり5～6kg。 ③種子消毒は必ず行う ④播種：栽植密度 10a当たり12,000～15,000株（条間：60～70cm、株間：10～12cm） ⑤雑草防除：播種後、土壌処理剤をむらのないよう均一に散布する。
	中	○ 雑草防除  (出芽期)	
	下		
7	上	中耕	中耕：雑草の発生を抑え、根張りを良好にするために、畝間を軽く耕耘する。  培土：雑草の発生を抑え、倒伏を防止するため、子葉節が隠れる程度の高さに培土する。 (病害虫防除)：カメムシ類の発生が多い場合には防除する。
	中	培土 [病害虫防除]	
	下	△ △	
8	上	△ [追肥] (開花期)	(追肥)：元肥を施用しない場合、生育状況を見て、必要に応じて速効性肥料で追肥を行う。 ※緩効性肥料の場合は培土作業の前に施用する。  病害虫防除：莢伸長期～子実肥大初期には害虫がつきやすいので、カメムシ類の防除をする とともに、紫斑病の防除も行う。
	中	病害虫防除	
	下		
9	上	病害虫防除	病害虫防除：子実肥大初期に、カメムシ類、マメシクイガ、シロイチモンジマダラメイガ 及び紫斑病の防除を行う。(防除薬剤は8月下旬と同じ) ※ハスモンヨトウが発生した場合は、早めに、防除する。  病害虫防除：9月上旬の防除で発生を抑えることができなかった場合などさらに防除する。
	中	病害虫防除	
	下	病害虫防除	
10	上	(黄葉期)	刈取：10月下旬～11月上旬、葉や葉柄が黄変して落ち、莢が褐変し、子実が硬くなって、 莢を降ると「カラカラ」という音がるようになった時が成熟期で、平年の場合は 10月下旬である。刈取適期は成熟期後、茎の水分が50～60%、莢の水分が20%以下 になった時期で、成熟期後7～10日で達する。大豆刈取機か人力による抜き取りを行 う。作業は朝露の残っている午前中に行うと裂莢による損失が少ない。 <コンバイン収穫の場合> 茎の水分が50%以上であると汚粒が発生しやすいので、50%以下になり、茎を手で 折るとポキッと折れる状態になってから収穫する。成熟期後、14～20日で達する。十 分に乾燥させてから作業を行う。朝露のあるときや雨天時には脱粒・選別性能が低下す るほか、子実が汚れて品質も悪くなるので、作業はできない。 乾燥・調製：大豆刈取機・人力による抜き取りを行った場合は、地干し、島立て、架干しな どで予備乾燥した後、スレッシャーまたは動力脱穀機で脱穀する。脱穀時の水分が多 いと汚粒が発生するので、十分乾燥（水分17～18%）してから脱穀する。選別機で 選別し、唐箕にかけて、茎、莢、ゴミなどを除去する。水分15%になるように乾燥 する。
	中	(落葉期)	
	下	■ (成熟期) ■ 刈取	
11	上	■ 乾燥 ■ 調製	
	中		
	下		